

企画テーマ

## 近代日本のキリスト教——禁制の時代から新しい時代へ

同志社英学校が設立されたわずか2年前の1873年、全国に立っていたキリシタン禁制の高札が撤去されました。これによって、1614年に始まった260年近いキリシタン禁制の時代は、ようやく終わりを告げることになりました。その意味では、キリシタン禁制の高札は、江戸時代においてキリシタンたちをあぶり出し、弾圧する道具として使われた踏み絵と共に、迫害期の象徴と言えます。今回の展示では、神学部が所蔵する二つの高札のうち、文字がより鮮明に残っているものを展示いたします。

江戸時代においては、キリスト教を根絶させるために「宗門改(あらため)」という制度も設けられていました。家ごと、あるいは、個人ごとに仏教の信者であることを檀那寺に証明させる制度です。1640年に幕府直轄領に宗門改役が設置され、宗門人別帳を作り、その後、全国の諸藩でも行われました。この制度も、キリシタン禁制の高札と同じ1873(明治6)年まで続きました。今回の展示では、文久2(1862)年に作成されたキリシタン宗門改証を展示しています。

1873年以降、あるいは、大日本帝国憲法(1890年施行)において条件付きの信教の自由が認められて以降も、キリスト教は日本社会でしばしば警戒心や敵意をもって見られましたが、教会や学校を中心に着実に裾野を広げていきました。1875年、新島襄は同志社英学校を設立し、日本社会に大きな影響を与える人物を多数輩出しました。今回の展示では、新島から直接強い感化を受けた人物である原田 助(1863-1940)と安部磯雄(1865-1949)の直筆の書を展示しています。この時代の人びとは、自分の信念を書にあらわしたり、それを人に贈呈することを好んで行いました。

原田や安部をはじめ、新島の思想の影響を直接・間接に受けた人物たちについて詳しく知りたい場合には、沖田行司『新編同志社の思想家たち』(晃洋書房、上2018年、下2019年)が便利です。今回の展示をきっかけに、新島の精神がどのように継承されていったのかについても関心を持っていただければ幸いです。(小原克博)

